

日本の卓球台製造・販売をリードしてきた校友たち

リオデジャネイロオリンピックのオフィシャル・サプライヤーとして卓球台を提供した会社のルーツをたどっていくと、二人の校友がいました。
松田英男さんと三浦 慎さん——
今号では、われら専修人Special版と題して、日本の卓球台製造を牽引してきた二人の校友に登場いただきました。



松田英男さん (昭45・商業) (写真右)

マツダ工業株式会社 代表取締役

まつだ ひでお ●1947年生まれ。1970年(昭45年)商学部商業学科卒。卒業後、会計事務所就職。2年後、三英商会(現、三英)入社。後、マツダ工業の2代目社長に就任する。

三浦 慎さん (昭60・経営) (写真左)

株式会社三英 代表取締役社長

みうら しん ●1961年生まれ。1985年(昭60年)経営学部経営学科卒。卒業後、三英に入社。営業部長を経て2000年に取締役就任、2002年から代表取締役社長を務める。

リオ五輪の卓球台は、校友の手によるものだった

2016年の夏は、リオデジャネイロオリンピックで大きな盛り上がりを見せました。獲得したメダルは、金銀銅合計で41個と過去最多を数え、連日の熱戦に眠い眼をこすりながら仕事へ、学校へ向かう人が続出したようです。

そんな睡眠不足の原因の1つとなったのが、卓球でした。銅メダルを獲得した女子団体では福原愛選手の涙に心を動かされ、個人として初の銅メダルを獲得した水谷隼選手をはじめ、団体

でも銀メダルに輝いた男子の姿にも大いに沸きました。そんな彼ら、彼女らの姿を思い出すとき、一緒に脳裏に浮かぶのが、鮮やかな色の天板と美しいX型の脚部をした卓球台です。

この卓球台、『infinity (インフィニティ)』というのですが、これが日本製だということは、さまざまなメディアで紹介されたのでご存知の方も多と思います。ところがそれだけではなく、実は、生産・販売元である株式会社三英の代表取締役社長・三浦 慎さんは、『日本卓球台の父』と呼ばれる松田英治郎さんのお孫さんであり、専

修大学の校友です。しかも、英治郎さんの息子で、長年、卓球台生産を担ってきたマツダ工業株式会社の代表取締役を務める松田英男さんもまた、校友



リオデジャネイロオリンピックで使用された「infinity」。美しい曲線を描く木製脚部とともに特徴的なのが、「レジュブルー」の天板。選手が見やすい色、テレビでも映える色を追求し、光の加減でブルーにも、グリーンにも見える鮮やかな色合いに到達したといいます。また、レジュブルーという名称には、「新しい命」というメッセージが込められています。

の一人なのです。

「父・英治郎は、1940年から松田材木店を営み、戦後の卓球人気が高まりつつあった頃から卓球台メーカーに材木を卸していました。しかし、当時は桂材を接ぎ合わせていたため、天板の乾燥が甘いと反りが出てしまったのです。それを何とかしようと研究・開発したのが、細かい端材でつくった芯板の表裏に単板をはった5層構造のランバーコアでした。この特許を取得したことで、自ら卓球台の生産へ乗り出すようになったのです。それが1957～1958年の頃でした」(松田さん)

松田さんが、10歳くらいのときのことで、1956年に世界卓球選手権大会

男子シングルスで荻村伊智朗選手が優勝、1959年に世界卓球選手権大会女子シングルスで松崎キミ代選手(現姓:栗本)(昭36・商経商)が優勝し、「卓球日本」に日本中が沸いた頃でもあります。そこから卓球人気が盛り上がりはじめ、㊤(マルエ)印の卓球台は販売数を伸ばしていくことになります。その様子を中学、高校と見てきた松田さんであれば、さぞや卓球熱も高かったのだらうと思ったのですが、本人はそうでもなかったようです。

「専修大学に入学してから入ったのは、カメラクラブでした。昔から写真を撮るのが好きだったんですよ。当時の仲間とは、現在も時々集まっています」

とはいえ、卓球を避けていたのかというと、それもまた違うようです。

「商学部商業学科を選んだのは、いずれ会社を継ぐことを意識していたからです。学生時代から木場へ行って材木関連のアルバイトをしたりしていました。私にとってマツダ工業という存在は、意識する、しないというものではなく、継ぐことが当たり前の存在だったように思います」(松田さん)

松田材木店が法人化され松田合板工業株式会社となった後、社名変更したのがマツダ工業で、卓球台の生産を本格的に始めた1962年、その販売を担うために設立された別会社が三英商会(現在の三英)です。『三英』という名

卓球台ができるまで

オリンピックでも使用される三英の卓球台が製造されている北海道の足寄工場。そこには美しいデザイン性と正確無比なボールのバウンドを実現する卓球づくりのノウハウが詰まっています。



足寄工場外観。ここに三英の卓球づくりの粋が集まっている



天板制作に必要な部材をカットしていきます



天板の大きさに合わせた額縁の中に小割りにした積層材を埋めていきます



天板の表と裏に単板の積層材を貼りあわせて、プレス機で圧力を加えます